

長逝せる弟を哀傷ぶる歌一首 并せて短歌

三九五七番

天離る 鄙治めにと 大君の 任けのまにまに  
 出でて来し 我を送ると あをによし 奈良山過  
 ぎて 泉川 清き河原に 馬留め 別れし時に  
 ま幸くて 我帰り来む 平らけく 斎ひて待てと  
 語らひて 来し日の極み 玉梓の 道をた遠み  
 山川の 隔りてあれば 恋しけく 日長きものを  
 見まく欲り 思ふ間に 玉梓の 使ひの来れば  
 嬉しみと 我が待ち問ふに 逆言の 狂言とかも  
 はしきよし 汝弟の命 なにしかも 時しはあ  
 らむを はだすすき 穂に出づる秋の 萩の花  
 にほへるやどを 朝庭に 出で立ち平し 夕庭に  
 踏み平げず 佐保の内の 里を行き過ぎ あしひ  
 きの 山の木末に 白雲に 立ちたなびくと 我  
 に告げつる